

----- (前回からの続き) -----

モトコ「チアキ、このうわさ聞いた？」

モトコはアキコ先輩の退職の後、ちょっとはしょげていたが、翌日になるともう元気全快になっていた。そして、そのうわさ好きは相も変わらずで、直りそうもない様子だ。

モトコ「どうも、ここ数ヶ月、ウチの会社のJourWebDesign社とグループ会社のTrueBios社とで、業務連携の見直しを行っていたらしいんだけど、一年くらいかけて、ウチの技術部隊を向こうの会社に移転するらしいよ。それで、その陣頭指揮をとってるのが...」

チアキ「誰？」

まさかとは思いながらモトコの誘い文句に答えるチアキ。

モトコ「なんと、タイチさんなんだって。移転する会社の方は一年前にタイチさんが引き抜かれた後、引き継いでアキコ先輩が環境を整えていたから比較的スムーズにできるだろうって。う・わ・さだけどね」

うわさといってもモトコの場合は、かなりの確率で当てていることから考えると、彼女の情報ソースは会社の上層部の人に違いない。

モトコ「でも、向こうの会社で、アキコ先輩があれだけ力を注いでいた業務連携の整備だったのに、これからって感じなのに。なぜ出向先から戻って、すぐに他社の引き抜きに応じちゃったんだろう？それが未だにわかんないのよね」

アキコさんはタイチ先輩のために引き継いで仕事をやってたのよ...。チアキは心の中でモトコの疑問に答えた。

モトコ「それでさ、タイチさんも数ヶ月後には、元いた会社に出向になっちゃうれしいよ」

チアキ「ええ！そ、そうなの？」

その後、ひとしきりモトコは今回の件について自説を展開したけど、途中からはかなり脚色が入っていきそうだった。どこまでが本当かわからないけど、まるっきり外れでないのは、今までのモトコのうわさ的中率からいって確かだった。

午後からのクライアントでの打ち合わせの後、古風な感じの喫茶店でタイチとチアキは挽きたてのコーヒーを堪能していた。会社の休憩室にある紙コップのコーヒーに飽き飽きしていた二人は久しぶりの香りに満足だった。

タイチ「どう、パイプは理解できた？」

チアキ「言葉だけでは、やっぱり。どうしてもだめでした」

タイチ「あの説明では誰でもわからないと思うよ。実際にやってみる？」

チアキ「はい」

チアキはノートパソコンを取り出して、お決まりのfoobarディレクトリに移動して、タイチの説明を待っていた。

タイチ「echoコマンドを紹介するね。echoは読んで字の如くエコーなんだ。実際にやってみたほうが理解が早いよ。"echo hello"とコマンドを入力してみて」

チアキはささっとコマンド入力して、エンターを押した。

```
C:¥foobar>echo hello
hello
```

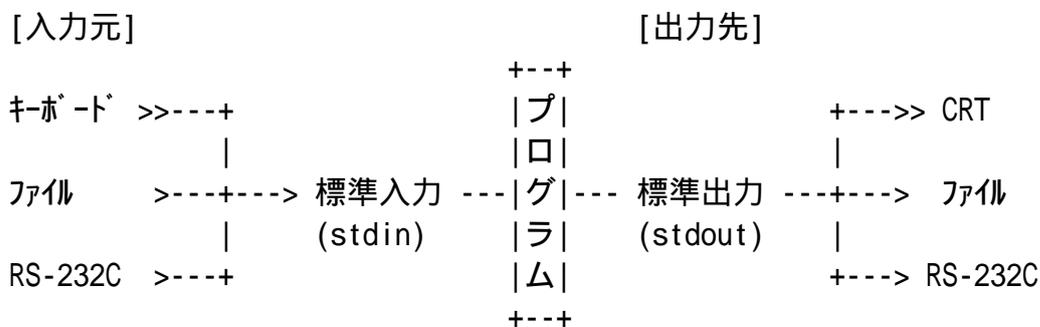
チアキ「helloが表示されましたけど...」

タイチ「そう、画面にhelloと表示されたよね。わかったかな？ echoコマンドはechoの後に続けて書いた文字を画面に出力するだけのコマンドなんだよ」

チアキ「なんで、そんなコマンドがあるんですか？」

タイチ「いろいろと役に立つことがあるんだけど、今はその動作だけに注目してみて」

タイチはバッグからちらっと見えていたチアキのノートを指差した。チアキがこれですか？という感じでノートを渡すと、タイチは目的のページをめくって言った。



タイチ「この図と照らし合わせるとキーボードからの入力をechoコマンド、つまりプログラムがCRT(画面)に出力していると捉えることができ

るよね」
チアキ「は、はい...」

また、この図かぁ。わかるようでわからない図なんだけど。とにかく、真ん中の四角いプログラムって書かれているところが、echoってコマンドなのよね。echoってコマンドはキーボードから"hello"という文字をもらって、その文字をそのまま画面に表示しているってことよね。まるで、バスケットでもらったボールをすぐに他の人にパスするみたい。

タイチはチアキが何やら理解してきたのを確認して次に進んだ。

タイチ「dateコマンドを思い出してみて。dateをコマンド入力すると変更する日付をキーボードで入力させたよね。ピンときた？」

チアキ「だめです...」

タイチ「この二つのコマンドを繋げることができたら、echoコマンドの文字をdateコマンドに引き渡すことができそうじゃない？そしたら、わざわざ日付ファイルを作ってリダイレクトする必要がなくなるよね」

チアキ「...」

だめだわ。まるでわからない。実際に見ないとわからないのかなぁ。タイチ先輩そろそろ実際にやってくれればいいのにとチアキが思ったとき、ちょうど、タイチが助け舟を出した。

タイチ「さっそく試してみようか。まず、dateで日付を確認してみて」

待ってましたと、チアキは"date"を入力したしてみた。確か、日付を確認するだけだから:の後にはエンターだったわね。チアキが続けて:の後にエンターを押すとプロンプトが出てきた。やっぱり。

```
C:¥foobar>date
現在の日付は 2004-05-07 (金)
日付を入力してください(年-月-日):
C:¥foobar>
```

タイチ「じゃあ、echoとdateを繋いで、過去の1999-12-31に日付を戻すことにしようか。コマンド、つまりプログラム同士を繋ぐための記号は"|"を使うんだ。縦棒はパイプのイメージだよね」

タイチはチアキのノートに"echo 1999-12-31 | date"と書き加えた。チアキは見覚えのない記号にちょっと戸惑った。え！何よ、この"|"って。あまり使ったことがない記号よね。チアキはキーボードからこの"|"という記号を探して、バックスペースキーの横にそれがあつたことに気付いた。生意気にシフトキーで入力するのね。

そして、タイチの"さぁやってみて"という目配せにチアキが従った。

```
C:¥foobar>echo 1999-12-31 | date
現在の日付は 2004-05-07 (日)
日付を入力してください(年-月-日): 1999-12-31
C:¥foobar>
```

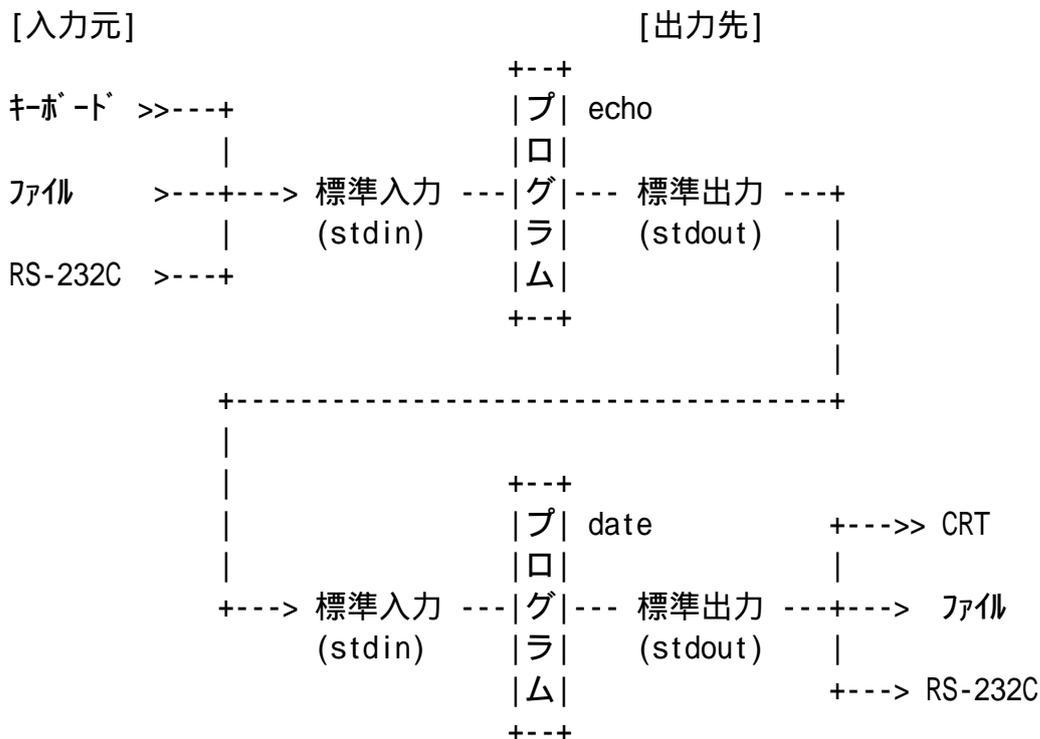
ゆっくりと間違えないようにチアキが入力していく。最後にエンターを押した瞬間、画面には変更した日付が表示されていた。

チアキ「エェーッ！スゴイ。何でこうなるんですか？」

タイチ「echoコマンドで指定した"1999-12-31"がdateに引き渡されて、日付設定されるんだよ」

チアキは、別々に覚えたDOSコマンドのechoとdateが"|"で繋がって、日付を変えていることにとても感動した。"|"って何なの？何で繋がるの？パイプって何？ハテナマークが頭の上に一杯浮かんでそんなチアキを見て、タイチはノートにまた図を書き始めた。今度はかなり大きな図だ。

タイチ「要はパイプの仕組みって、こういう事なんだけどね」



チアキ「何かわかったような、そうでないようなですけど、この図で理解できそうな気がします。つまり、あるコマンドの出力があるコマンドの入力に繋がるんですよね。ホースを繋ぐみたいにですか？」

タイチ「そうそう、その理解はいいよね。例えば、一番目のプログラムに入

力ホースと出力ホースが繋がっていて、そのプログラムは海水を真水に濾過する機能を持っているとすると、入力ホースに海水を入れると出力ホースからは飲める真水が出てくるわけだね」

チアキが、今度はわかるという感じで、うなずいている。

タイチ「で、二番目のプログラムにも入力ホースと出力ホースが繋がっていて、そのプログラムは砂糖を混ぜる機能を持っているとすると、入力ホースに海水を入れると出力ホースからは砂糖の入った海水が出てくるよね。でも飲めるわけじゃない」

タイチが何を言おうとしているのか、薄々わかり始めたチアキは次の言葉を待った。

タイチ「でも、一番目のプログラムの出力ホースを二番目のプログラムの入力ホースに繋げると、今度は...」

タイチがそれに続けて言おうとすると、チアキも同じことを言った。

タイチ「飲める砂糖水！」

チアキ「飲める砂糖水！」

ハモったわけじゃないのに、二人とも以心伝心っぽくて、心地よかった。

タイチ「ご名答。さすが、チアキちゃん、理解したね」

チアキは嬉しかった。タイチに誉められたのもあったが、さっぱり理解だったりダイレクトとパイプが何をしようとしているのかわかり始めたこと、Windowsではこんなこと絶対出来ないという秘法のような部分を知ったのが嬉しかった。

タイチ「でも、今日やってみたのは、パイプの基本中の基本の説明なんだ。こんなものが仕事とかに何の役に立つのかと思うよね。でも必ず役に立つと、今のところ思って欲しいんだ」

タイチは熱弁を振るい始めた。チアキが説明についてこれないだろうと思ったが、言葉のいくつかが残れば良いと思って語りきった。

タイチ「全てのコマンド、つまりプログラムが標準入出力を有効に使えるように設計されている訳じゃないんだけど、きちんとしたプログラムだったらダイレクトやパイプを使ってデータがプログラムを渡り歩けるようになってるんだ」

チアキ「...」

タイチ「Windowsになって忘れ去られたものって、役割を明確に決められた

プログラム同士が標準入出力を通してデータをやり取りしあう姿だったんだよ」

カリカリ…。いつの間にか、チアキはタイチの言葉を漏らさないようにとメモを取り始めていた。正直、チアキには最後の熱弁はわからなかったけれど、タイチ先輩がDOSで伝えたかったことがココにあるんだってことは直感していた。今はわからなくても、いつかきっとその意味がわかるはずだわ。

チアキがメモをまとめ終わるまで、数分掛かった。タイチはチアキが懸命にノートにまとめているのを見て微笑ましく、そして、教えてくれてよかったと感謝の念すら感じた。

タイチ「最後に、パソコンの日付を今日に戻しておいてね。Windowsを使ってもいいけど、チアキちゃんならDOSでできるかな」

チアキは、もちろんという表情で、以下のようにコマンド入力した。

echo 2004-05-07 | date

タイチ「ふー。長い間、おつかれさまでした。これで、DOSの説明はおしまいだよ」

チアキ「ほんとですか!？」

タイチ「ほんとさ。もちろん、DOSのコマンドは説明したよりはるかに多いし、バッチのプログラムとか応用は無限だよ。もし、より詳しく勉強したかったら本を買って学ぶといいよ。もう、十分に本の内容は理解できると思うよ」

チアキ「うー。私がDOSを最後まで勉強できたなんて信じられないですよ。タイチ先輩のおかげです」

タイチ「どういたしまして。でも、チアキちゃんの頑張りがあったからだよ。途中であきめてしまう人はたくさんいるのに、よく粘ったね」

チアキ「ありがとうございますっ!でも...DOSって...凄いんですね!」

*

DOSの説明が終わって、タイチが財布を出そうとし始めたとき、チアキは気になっていたモトコからのうわさ話について、誰から聞いたでもないそぶりで思い切って聞いてみた。断ると思っていたタイチは取り出した財布をテーブルに置き、そして、チアキちゃんだからという前提で、慎重に言葉を選びながら答え始めた。

タイチ「元々は、二社でウェブデザイン機能とプログラム開発機能の二つを同時に持っているのは経済的でないということで話が進められたんだけど、それとはまったく別に自分と水口さんは仕事をする上で、きちんとした業務分担が必要だからと上層部とぶつかっていたんだ」

チアキ「アキコさんとは対立してたんじゃない？」

タイチはYES・NOが、今回の答えにはふさわしくないと思って、直接チアキの答えには応じずに話を続けていった。

タイチ「僕は両社はそれぞれ同じ機能を持っていてもいいと思っているんだよね。会社毎に技術が強いとかデザインが強いとか特色はあっていいけど、地域性とか営業とか考えると過度の役割分担や分離は好ましくないと思うんだ。効率も落ちるし判断も遅くなるしね。結局、経済的じゃなくなる。その点は水口さんも同意見だったんだ」

チアキは奥の深そうな話にじっと聞き入っていた。タイチは、コーヒーのお代わりを注ぎに来たウェイトレスを丁寧に目配せで断りながら、話に集中していった。

タイチ「彼女は僕がこちらの会社に引き抜かれた後、あるべき業務分担を進めていった。僕も彼女の元いた会社の中でそれを進めていった。仕事の仕方は一年前とは変わってきてただろう？例え、僕と彼女の仕事の進め方に違いはあっても本質的には同じことをやっていたんだ」

確かにチアキがこの会社に入った一年目は初めてのことばかりでわからなかったこともあったけど、グラフィックデザイン、HTMLレイアウト、プログラム、テスト、ユーザへの説明といった仕事が雑然とこなされていた。一人二役三役は当たり前。でも、納期遅れは当たり前のような感じで、品質が悪いとクライアントにクレームを付けられて電話で謝っている先輩もよく見かけた。

それが二年目くらいから徐々に仕事が分けられて、それぞれが専門職化していったことを思い出した。今ではクレームも殆どないし、納期遅れはホントに僅かしかない。ウェブデザインのスケジュール管理をしているチアキにもそれはよくわかった。

タイチ「会社側はチアキちゃんのウェブデザイン部の業務説明と打ち合わせに出席したメンバーからの報告を聞いてどの程度業務分担が可能か見極めたんだろう。結果、移転したほうがよいだらうと結論付けたみたいだ」

チアキはアキコとの話を思い出していた。アキコさんにはアキコさんの気持ちがあった。少しだけ体裁のないホントの気持ちを伝えてくれた。タイチ先輩はどうなのだろう。飾りのない気持ちを知りたいと思ったチアキは思い切って聞いてみることにした。

チアキ「タイチ先輩はそれでいいんですか？」

タイチ「よくないよ。彼女は自分の進めてきたことが違った形で使われたことが、我慢ならなかったから、今回の件を最後にきちっと終わりたい」

かったんだと思うよ。僕も彼女も現場のメンバーもそれぞれが全力で、それぞれの思いでやってきたんだ。成果だって上がってる。効率も利益もね。僕にはこれからどうなっていくか、見届ける責任があると思ってる。移転が成功しても失敗しても...」

タイチはとっくに空になったコーヒーカップを見つめながら、自分に言い聞かせるように話していた。チアキには僅かに声が震えているように聞こえた。

チアキにはわからない世界なんだと思った。タイチ先輩も事態をコントロールしきれずに悩んでいるんだ。アキコさんの辛さは全部わからないけど...。タイチ先輩の辛さも全部わからないけど...。自分には何もできないけど...。

*

タイチ「そろそろ、出ようか...」

重苦しい雰囲気を通り切るようにタイチが言い放つと、すっと立ってレジに向かった。チアキは急に席を立ったタイチに遅れまいとノートパソコンと大切なノートをバッグに詰め込んで後を追った。

支払いを済ませて、外に出た頃には夕刻になっていた。まだ、退社時間には少し早いせいか、人影はまばらだった。とりとめのない話でお茶を濁しながら歩いて、チアキはタイチと分かれる道にやってきた。右がチアキが帰る駅に続く道。そして、左がタイチが帰る駅に続く道だ。左右に分かれる道の岐路で、二人とも立ち止まっている。

本当の自分、スタイル、すれ違い、タイミング、素直な気持ち、チアキの頭の中で、数日間に起こった大切な事柄がぐるぐる回っていた。

タイチ「DOSの勉強も一通り終わったね」
チアキ「そうですね」

タイチ「おつかれさまでした」
チアキ「いえ、そちらこそ」

タイチ「がんばったね」
チアキ「いえいえ」

タイチ「DOSを理解する人は少ないんだよ」
チアキ「優秀な生徒だったでしょ？」

タイチ「質問が多いしね」
チアキ「優秀な証拠です」

タイチ「悩むと動作が止まるし」
チアキ「考えてる証拠です！」

タイチ「カリカリとメモ魔だし」
チアキ「必死なだけですっ！」

馬鹿な問答に気付いて、二人で思いっきり笑った。

タイチ『チアキちゃんて、こんなに笑顔が可愛かったっけ...』
チアキ『タイチ先輩が大声で笑うの初めて聞いた...』

背後から夕日の光が二人をつつんでいる。二人の影は同じ道に向いている。傘も差していないのに影と影の距離はちょっと離れてる。その瞬間、タイチの影がチアキの影にそっと寄り添った。

タイチ「今度の休日、空いてる？」
チアキ「うん」

初めてチアキが素直に気持ちを表した言葉だった。

----- (おわり) -----

Copyright(C) 2005 rpn hacks! All rights reserved